

民國佛教期刊文獻集成

任繼愈題



民國佛教期刊文獻集成

任繼愈題

第 112 卷



南瀛佛教會會報

中國書店

南瀛佛教

號 月 七



南瀛佛教會發行

目次

○卷頭言	神田惠雲	一
○支那に於ける新僧運動	李添春	二
○三教思想と臺灣の宗教	吳真玉	六
○臺灣佛教が斯うであつたら嬉しい	葉妙景	八
○吾人何故信佛教乎何爲學佛乎	曾來	二
○怎麼要信仰佛陀？	法雨	六
○讀希望僧尼菜姑去實行結婚後	蘭雲	三〇
○同	南生	三三
○還睡着的僧尼們快起來吧！	林秋梧	三四
○慎淨大師中國旅行筆記(其二)	施真諦	三九
○學佛與佛學的略說	張成霖	四〇
○十惡業概說	林瓊淵	四四
○論僧伽身份與義務及不振原因		
○會費領收報告		

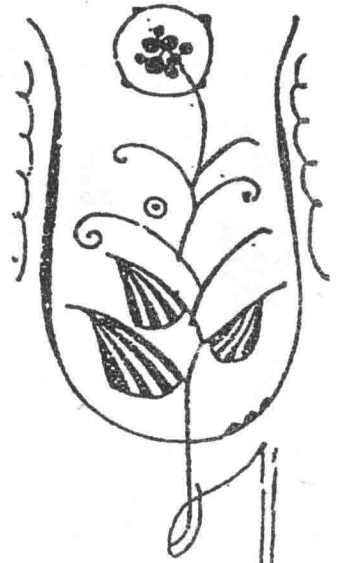


南瀛佛教

第九卷 第七號

在大正七年之宗教調查、本島僧侶總數計有七百八拾九名、齋友總數計有一千壹百零九名、而道士有八千六百六拾參名、巫覡壹千七百拾六名、術士壹千零五拾貳名、此種調查、既經過十餘載之今日、數字上之變遷不啻有隔世之感、就世態人情亦多推移矣、我今暫且借此來論、就可知在大正七年間、所謂佛教徒者（和尚齋友）合數有壹千八百九拾八名、而佛教徒以外依賴宗教生活者、無慮壹萬壹千四百參拾壹名、雙方比較起來、道士等比佛教徒多有十一倍弱、此種本島宗教界現象、含有甚麼意義、識者不卜可知矣

且近來社會環境愈變、宗教受外來思想之打擊、似乎日趨式微、就中本島在來之佛教、益形衰頹、當大正七八年間曾住四五拾衆之寺院齋堂、現下只有十餘衆或二三衆而已、而道士巫覡術士反爲漸次增加、此種現象到底從何所來、請諸君靜々研究看、在我所想、從來本島佛教徒都是教人誦經拜懺、教理上只說地獄輪迴、而一般人亦認定此是佛教、不許後人容入加減、如斯墨守執着根性、一朝將此打倒、必惹起否定之態度、於是乎佛教陷在進退維谷之地位、日漸衰微蓋其然哉、故我等際此總會時期、將本島佛教面目一新、捲土重來爲要



支那に於ける新僧運動

在 厦 門 神 田 惠 雲

支那佛教の改造又は革命云ふことは最早机上の空談ではなく、一部佛教徒の間には人道的な戰闘氣分を以て教界の革新に努力せられつゝあるが、何處までも保守的な教界に於ては現状維持の心理を以て善的價值ありと崇め、現状打破の倫理を以て獸制的權力の下に惡の名を以て蹂躪せんとして居る。然し民族的にも政治的にも革命の爲め努力しつゝある支那に於ては、同時に宗教の上にも亦其の革新の爲め殉教者の精神と獻身的努力を以て創造の道を辿らねばならぬ。

從來の支那佛教は二三の眞摯なる學徳兼備の高僧を除く外は殆んど其の本質を失つた市場宗教に墮落し、辛うじて命脈を保つて居るのみであつて資本主義文明の毒素の中に死の亂舞を續けて居るに過ぎない。

昔日の隆盛は當時の國王の擁護と二三の地方資本家の特殊なる力に依て勃發的に大伽藍が建築せられ、寺領が附與せられたものであるから時代の變遷と多年の習慣とにより僧侶は何時の間にか封建的迷妄と誤謬的陶醉に陥り時代を統率する大乘運動を起すべき氣力を失つてしまつた。

然し時勢は最早概念を食ひ喫想的内觀に沈んで居たり、傳統の力を藉て食飯待死する事を許さない、國內には軍閥の鬭爭絶え間なく、外よりは敬虔なる信仰をも無視せんとする赤色の波が押し寄せて來る時、能く實生活の利害鬭爭の上に立

つて時代を凝視し、洞察し、批判し、以て大衆を指導する能力を持たざるものは教界自身の反省改革を待たずして社會は先づ之を破壊し打倒して其の存在を許さぬであらう。

支那の佛教は今や非常なる危機に際會して居る。宗教を目して阿片を見る赤化運動は日々夜々に濃厚となり、全國的に無政府共產主義者聯盟なるものが組織せられ、國民黨との間に抗爭の絶え間なく、從て寺領の沒收、僧尼の解放等は最早實際問題として當面しつゝある。かゝる無畏なる破壊行動に對して今後如何にして教壇を守りぬくか、又正當なる批判力を以て如何に現代の頹廢文明に抗して躍進して行くかは今後支那佛教に與へられた致命的大懸案であつて、かくの如く一面には外敵を防ぎ他面には内省向上の道を得て能く病弊充滿の社會に一抹の光明を與へ、以て民衆生活の基調を提示して行く機最大の期待を以て見なければならぬ。

此の難關に處して支那佛教の指導原理として様々に意見が立てられて居ることであるが、就中比較的穩健派に屬し而かも僧界の革命を號んで止まない太虛法師の新僧運動は亦特筆に値する、彼の説に従へば

支那佛教の僧寺は内に二千年の背景があり、外には時代、國家、世界と云へる環境がある。是を以て中國佛教の革命を論ぜんには二千年の歴史を有する僧寺を除いては之を云ふする事は出来ぬ。若し僧寺を除外して廣汎なる學術化的社會化的佛教革命を論ぜんとするならば、それは恰も民族主義を拋棄して世界革命と云ふと同様の危險に陥るであらう。若し僧寺を奪つて俗を以て普通の民衆を教化せんを欲せば、それは恰も中國共產黨が中國民族の自由平等の國民革命を奪つて第三インターナショナルの革命を要望すると同様の錯誤状態となるであらう。

と云つて居る、即ち彼の主眼とする所は現存の佛教僧寺を其の儘にして、長を取り短を捨て一方寺產の私有制度に極力反對すると共に又一面僧徒の向上を説き化導民衆を唱導し、確實なる僧伽制と信衆制とによりて十善文化の國家を建立せん

みするにある。

支那寺院の經濟組織竝に寺產整理は今日までの經過とは複雑なる關係を有するものであるから其の記述は後日に譲り今つ單に彼が提唱する此の僧伽竝に信衆に關する意見を綜合した所謂三佛主義なるものに就いて述べて見やう。

一、佛僧主義

- (一) 同志を聯合して主義あり、組織あり、規律ある革命僧團を成立すべし。
- (二) 全力を以て二千年來遺留し來れる僧寺財産を擁護すべし。
- (三) 僧寺の共有財産を剃派、法派の之を占奪し、子孫の私有財産として傳承せんとする制度に反對す。
- (四) 愚民の迷信を藉て鬼神に仕へ、以て生活をなさんとする無識の僧衆を憐憫し、佛教及國民の常識を灌輸して漸次に改良し、資生の事業を共營し、人群の生活に服務する様改良すべき事。
- (五) 剃派法派の傳承制を名として僧産を獨占し私利を計らんとする大小寺院の住持及大寺中かゝる行爲を助けんとする首領執事を驅逐すべし。
- (六) 剃派法派の傳承制を選舉制となし學校を經營して青年僧を教育し進んで社會事業をなさんとする菩薩僧を尊敬し擁護せよ。
- (七) 少數の住持の獨占せる私産僧産を回收して青年僧を教育し一般愚僧の生活を改良し慈善事業等をなす費用に充つべし。
- (八) 一般淡薄高尚にして戒律を勤持し禪定を修め深く慧學を研修せる有徳の僧を尊敬表彰し其の弘法利生を援助すべし。

(九) 僧律を遵行する能はざるもの又は之を欲せざる僧に警告を與へ自動的に還俗せしむ(例へば僧の制服は時々所によりて同じからず、雖も必ず民等しからず、僧服を穿つを欲せざる者は還俗すべし)

(十) 絶対に僧律を遵行する能はずして尙且つ強て僧中に在て反動の惡僧ならんとする者には強制的還俗を迫るべし。

二、佛化主義

(一) 學校教育、社會教育を補助し、帝制時代より傳燈し來れる愚民鬼神の迷信を一掃し、一般人民の思想を改正し提高し佛教に於て大體に眞の認識を以て正智の信仰をなさしむること。

(二) 革命僧を補助して僧産を獨占し僧律を破壊する所の惡僧を排除し一般惡僧の生活を改良せしむ。

(三) 有徳の菩薩僧を尊敬し擁護して僧衆の模範人天の師表となす。

(四) 佛教の學理を整理し闡揚して一般學術中に入れ教育界學界のための學術化をなさしむ。

(五) 革命僧を補助して青年僧を教育し社會民衆を教化せしむ。

(六) 佛教は簡單正確明瞭なるを以て軍政紳商農工教學の各界に向つて廣大の宣傳をなし普遍的に信順せしめ消極的には反對せざらしむ。

(七) 衆僧を聯合して救養及社會救済の目的を以て教育慈善事業をなす。

(八) 各其の爲す所の農工商紳軍政學教の地位に従つて佛教の正しき因果の理及十善行を以て各社會各階級の民衆を導いて漸次佛教的善行化をなさしむ。

(九) 地方的國家的世界的人類のために服務して積極的に各種の政治的社會的な進歩事業及救國救世の運動に参加する

事を努力し提唱す。

(十) 佛法を世俗化して自ら滅亡せんとする反動行爲を清除し佛法を以て世俗を化導することに努むべし。

三、佛國主義

佛書の中に言へる國土とは世界を指した言葉で菩薩の行ふ所のものは皆淨佛國土の行と名付けられて居る、換言すれば社會國家乃至世界を改善する行爲は總じて之を社會善化淨化行爲と云ふ事が出来る、こゝに「自他共同思想行爲生活の交互關係」の社會がある。然るに創建或は改造の淨佛國土の行は既に社會の共業行であるから僧家信家に依て分に隨て聯合行動をなさねばならぬ。即ちこゝに「中國信佛民衆會」並に「國際信佛民衆會」なるものを組織し全國全世界の廣大なる行動をしなければならぬ。佛教の精進的活動的生命觀及淨慧的人生觀に根據して精神的方面にありては各種の社會制度……經濟政治教育及各種の社會文化……或は文學語學禮俗風習思想學說藝術教化等……を改造する運動をなし婚喪慶弔等一切民衆の行爲は之を佛教の十善行化せしむ事。更に物質的方面に於ては水陸空界の交通便利便を増進し各種の地利水利並に林場礦場工場商業等を開闢し發達せしむ、以て家給し人足る時聲に物さかんなる安樂國土を造成しなければならぬ。

以上掲げた所が大虛法師の主張する新僧運動の概要であるがこの三主義はも一箇の「佛教救世主義」であるけれども現時の教界の狀況より之を見る時、又一箇の「佛教革命主義」に外ならない、破壊的革命に對して彼は之を建設的革命と唱へて居るが其の實行に當つては相當の破壊を豫想しなければならぬ、固より破壊の目標と手段と順序とは一絲亂れず慎重に行はねばならむ事であつて從て是等三箇は分析して任意に一箇を採用する事は出来ない、而して其の順序は第一期に在りては人生佛教の理論の建設に努力し、佛僧主義の宣傳と實施とが進行するに及んで、同時に又佛化主義と佛國主義を宣傳す

る、第二期には佛僧主義を完成し同時に佛化主義を促進し實施し併せて佛國主義を宣傳する。第三期に至つて三佛主義を完成して全世界に推行せんとするに在る、惟ふに佛教は支那人民の信念上に強く深く其の根底が植ゑつけられ、祖先傳來崇佛の念篤きが故に今後より一切の迷信を打破して真正なる信仰に導く事を得ば物質偏重の現實を變じて精神上人格上の德育を養成し、國家社會を安寧の域に置き人民をして眞善美の完全世界に趨向せしめ得る事は多言を要しない、然るに過去十數年來諸高僧諸居士によりて碎身的努力を以て教學を獎勵し宣化に努力し民衆化せる佛教の發揚に力を盡せる結果、政府も亦能く同情を表示し、制度の整理改革の爲めに内政部より寺廟登記條例並に寺廟存廢標準條例等を發布して誠意を以て之に當つて居る點より見れば今後僧徒の團結活動の上に非常なる光明を與ふるものと云ふべきである。

斯くの如く佛教整理は一面より見れば希望なきに非れ其他の面より之を觀察する時は尙々前途の暗澹を憂へざるを得ない、今佛教整理を困難ならしむる理由の特筆すべきものを列舉すれば

(1) 封建時代の貴族的色彩を帯べる事

之は何時如何なる國に於ても免れ難き趨勢であつて一面には僧侶自身の向上を阻害し、他面民衆との接觸を困難ならしめる

(2) 教義難解にして簡明なる民衆指導の原理を見出し難き事、釋尊當時に於ては所謂對機說法の人生佛教にして簡單直截容易に其の秘奥を採り、真理の根底に直入し得たものが漸く觀念化し「佛法は宗教に非ず、又哲學に非ず佛法は佛法なり」と稱し、瞑想思索に非れば其の蘊奥を極むべからずとて一般民衆は簡單直明に佛教の何たるかを了解し得ざるに至つた事

(3) 迷信的行爲の取除き難き事

佛教根本の目的は自覺と覺他とであるが之を換言すれば轉迷開悟と弘法利生とである。然るに現在支那佛教の轉迷開悟の方法として採用せるは燒香祀、住叢林、盤腿子、上殿であつて弘法利生の事業は念經、拜懺、放焰口、說開示、放生である。支那佛教徒の全部の事實は之に過ぎず、民衆も亦之を目して佛教とせる爲め今其の中の迷信的新舊を打破する事は直ちに僧侶の生活問題に關係する所であり、姑息的方法を以てしては到底現狀を如何ともなし難い

(4) 僧尼は社會より厭棄せらる

佛法は人々に信服せらるゝも僧尼は事實上一般より厭棄せられて居る、生活様式の相違と宣教能力の缺如とによるものであらうが、之をして社會の尊崇を受くるに至らしむるは容易の業ではなく、居士佛教の興隆せし所以も亦此處にありと窺はるゝ

(5) 寺院の實権は舊僧の手にあり

現在佛教寺院の方式は全く舊僧の把持獨占せる所であるから如何に佛教制度の改革を絶叫するも實権が舊僧の手にある以上新僧の競びも全く空想空談に歸するであらう

(6) 政府佛教を迫害す

政府は一面佛教をして自動的に整理を行はしめ、一機關を設けて整理せしめつゝありと雖も或る地方に於ては寺産の沒收、寺院の破壊せられたる事實少からず、之に對して献身的護法をしなければならぬ

斯くの如き理由は尙々多數に算へらるゝ事が出来るであらう、然るに今春上海に開かれた全國佛教代表大會は支那佛教界に於ける新僧運動の尙微弱にして舊僧に依て牛耳の取られて居る事を證明し、それだけ新僧に取つては非常なる失望に終つたのである。即昭和四年舊三月一日より三日間上海覺園に於て江浙佛教聯合會の發起にて支那全國十三省よりの佛教代表者二十餘人の來會を得て開かれた會合が「中國佛教會」の成立問題を議するのみにて何等佛教制度の改革問題にふれず、偶々「現在佛教界」の必要とする所は對外問題にして對內問題に非ずと發言し、軍閥に對する方策を提案するものもあつたが何等輿論を引き起すに至らず、有耶無耶にて葬り去られた事は新僧運動者の大なる期待を裏切つたと同時に老僧方丈の勢力の如何に大なるかを證明するものであつた。然れ共上述三佛主義の如きは太虛法師の主唱する所にして其の實現は前途遙遠の事と思はるゝが今後同師一派が如何なる方法にて實際運動に努力し、支那佛教界にどれだけのセンセーションを惹起すかは大に刮目して見るべきものがある。

三教思想と臺灣の宗教

李 添 春

一、序 說

近來臺灣の宗教に就いて有益なる研究や論說等が種々の方面に發表されて、本島に於ける宗教精神開發上頗る裨益することであり、又同道研究者に取ても以て他山の石とし參考の資料にもなるから、極めて好現象であり、同座に堪へないことである。

抑々宗教は一旦民族の習慣に織り込まれば一種不可侵的嚴肅があり、一般からは不言不語の間に行はれて少しも不審に思はない、縱使それが種々の弊害があり、時代思想に適切でないにしても一朝一夕之を改變することは容易のことではない、又逆に斯云ふ傳統的不文律の慣習の威力に宗教思想が潛伏してゐることは、敢て検討するまでもない事實であらうと思はれる。

臺灣の宗教とは本島在來の宗教、蕃人の宗教、及び内地外國よりの宗教等の三つに大別することが出来る。又本島在來の宗教といふものにも儒教・道教・佛教及び雜教等がある。本稿は特に本島在來の宗教を主題とし、以下儒釋道の三教關係に本島宗教の實際を聊か敘述せんとするものである。

元來本島人は南支那福建省の一部なる泉州漳州方面より移住し來れるものを主として、廣東省の一部地方よりの移住者を加へたものであるから、其の風俗習慣等に於て全く南支那のそれと同一なものである、而して其の固有の宗教はと言へ

ば儒教と道教とにして、佛教は外來の宗教に屬するけれども、本島人としては、儒佛道三教並同して南支那より本島に移住し來れるものであるから、今この三教を以て本島在來の宗教として敘述することは失當ではないと信ずる。

併し乍ら本島に於て上述したやうな儒道釋三教とも傳來して居るけれども、孰れも其の本來の教義を喪失して相互に相混淆し、所謂純粹なる佛敎道教若くは儒敎といふものは殆んど存在しない、儒敎徒と稱するものも其の内容を檢査すれば多かれ少かれ、道佛の思想を加味して居り、佛敎徒と稱するものも儒道と見らるべき思想を有してゐる、道敎徒も亦之に準ずることが出来る、無論四百萬人の中に純粹なる儒者や佛敎徒はないではないけれども、然し大多數は區別なしに三教を信ずるものが多い、實際農業に従事する多くの農民が儒佛道の三教を區別する餘裕をも有しない、一般は唯三教を混同して之を信奉するばかりでなく、往々にして佛敎と道教を同一視し、或は道教を以て佛敎と誤認するものも少くない、又或は三教の區別を知りつゝわざと混同せしめるものもある。斯くの如きは道教思想とか佛敎思想とか、三教の孰れか一つを以て律すべからざるものであつて、寧ろ三教を超越して新たに一種の宗教を形成してゐるを見るべきである、この新宗教は如何なるものであるか、或るものは之を民間宗教と稱し、或は之を文ミなし、或は雜敎或は迷信と謂はれてゐる。何れでも一理ないではないが偶然發生を許さない限り、その成立の過程がなければならぬ、この過程は正しく三敎思想即ち三敎一致思想に歸することが出来る、本稿は上述の着想に依り先づ三敎思想の淵源を探求し、更に本島に於ける信仰の實際に照らして以て聊か本島に於ける宗教思想を、明かにしたいと念願するものである。

一、三敎思想の淵源

三敎思想、詳言すれば三敎一致思想は、何時代何人に依つて端を發したか、之を詳述することは困難であるのみなら

す、又頗る浩瀚なものに亘るからは單に其の梗概を記述するに止める。先づ佛教側から見ると梁の武帝の朝、達磨渡來當時に遡ることが出来る、即ち梁の朝に傳翕字玄風と謂へる大居士があつて別に東陽菩提大士又は雙林菩提大士等の稱がある、普通には單に傳大士と通稱してゐる、其の傳記は佛祖統紀とか諸種の佛傳に詳しく出て居る、現在本島には殆んどないが支那や内地の各大寺院の經藏の正面に安置する立像は即ち是れ傳大士である、稀には畫像を安置して居る所もある、其の像には道冠釋服儒履の異装をなして三教を一身に集むる意を表はす、佛祖統紀には次の如き文がある。

大士一日披納頂冠、履、見上、上問是僧邪、士以手指冠、是道邪、以手指履、是俗邪、以手指納

此事は他の書にも見えてあるが、或は此の外に傳大士は常時道冠釋服儒履の姿をして居るに書いてある、忽滑谷博士はその著禪學思想史には以上の書籍を引用して批判してゐる、又武帝が屢々道を棄て佛に歸すべき詔勅を發してゐることを見ても少くも當時は三教問題に就いて相當議論があつたやうに思はれる。

說郛に三教論衡と題する一書がある白居易の著とある、これは故意を挾んで論争するものよりも、寧ろ三教互に相提撕研磨して以て治化を輔翼せしむるの趣旨である、その序文に

開達四聰、開揚三教

のあるのを見て知れる、次に三教解折論として有名なる原人論といふ書がある、其の序文に

孔・老・釋皆至聖、隨時應物、設教殊塗、内外相資、共利衆庶

と論じてあるから本書の内容も、之に依つて大體推知することが出来る、又宋代に法眼宗の高僧に智覺禪師と云ふものかあつて、儒釋道を合論したる宋鏡録といふ浩瀚な大著述がある、是れも亦其の序文に三教の長處を擧げて、儒・吾之師也、道・儒之師也、釋・道之師也とある、次に元の有名な劉詠の選に三教平心論といふものもある、是も「三教如鼎、缺一不可」との

宗旨であるから三教一致説に相違ない。

宋末臨濟宗の有名なる禪僧徑山師範が

三教聖人、同一舌頭、各開門戶、歸其旨歸、則了無二致

と言つて三教一致を信じ、宋の思想潮流に棹さして居る、又その神足に尊嚴祖欽といふ高僧がある、祖欽の語録に荆溪吳郡運書を載せて儒釋一致説を主張してゐる、即ち

竊觀聖人之道與如來之道同一道也、未嘗二也、聖人之道則率性、如來之道則見性、見性則可以明心、可以成佛、可以度衆生、率性則可以正心、可以修身、可以治國平天下、雖率與見異、而性則同也

これ即ち其の主張であるが眞理なきものではない、降て明の名僧鼓山元賢にも儒釋を併論してゐる

人皆知釋迦是出世底聖人、而不知正出世底聖人、不入世不能出世也、人皆知孔子是入世底聖人、而不知正入世底聖人

不出世不能入世也

これ孔子と釋迦とを同等の聖人としたものである、其外この類のものを佛教側から逐一記載すれば、非常に紙数を要するし、又殆んど同様のことを説いてゐるから爰に之を省略して、儒教道教側から三教一致思想若くは調和思想を有する人を二三挙げて見やう。

宋文帝の時代に張融といふ人がある、道德の道を以て人類の本性となしてゐる、其の死せし時、遺言して左手に孝經老子を取り、右手に小品法華經を取らしめたといふから、彼が平生儒・佛・道の三教を調和せんとする傾向の存在したことはこの一事に依つて知ることが出来る。

次に夷夏論の著者道士顧歡も亦この思想を有してゐる、即ち彼が述べて曰はく

佛は正眞ミ號し、道は正一ミ稱す、一は無死に歸す、眞は無生に歸す、名は異なれども、其の實は即ち是絕對にして所謂聖人なる者は此の絕對を體せる者なり、絕對は一にして二ならず、唯だ其の發現の形を異にするのみ、或は孔子ミなり、或は老子ミなり、或は釋迦ミなる、畢竟一なるのみミ

論ぜり、結論に於ては相互の差別を目的とするも、之を要するに願數も亦三教一致論をなせる者と謂はなければならぬ。隋末には儒教の一大革命者王通ミいふものあり、唐書王勃傳には祖通者隋末大儒也とあるから、儒教の偉い學者に違ひない、字を仲淹ミ稱す、其の著策論十二條、六經、中說十篇等ある、彼は中を以て天下を治むる根本原理ミなしてゐる。又三教も其の根本主義なる中に於て一致するミ主張する、即ち

曰はく執其中者惟聖人乎ミ、中ミは社會の人をして其の正を得せしむる所以の道なり、儒も佛も老も此の點に於ては即ち一なり、仲淹洪範論議を讀みて曰はく三教於是乎可一矣ミ、程元魏徵進んで其の故を問ふ、仲淹曰はく使民不倦ミ、民をして倦まざらしむるは人民をして其の正を得せしむるものにして、三教の一致する點なり。（文學博士遠藤隆吉著 支那思想發達史）

最後に顏之推を紹介する、之推は顏同の後にして世々儒者を業ミし、梁大同五年に生れ、北齊の朝廷に事へて黃門侍郎になつた人である、唐初に死せる人であつて其の著顏子家訓あり、彼の調和思想に曰はく、儒教は王公に屈せず、老莊が山林に隱るといふこミは之を罪ミするこミ能はざりしミ同じく、佛教に歸するものも亦た責むること能はず、其の上道を得て人民を化すれば自然に五穀の豐饒を得るものなりミ、以て其の精神のある所を察するに足る。

之を要するに佛教東漸後、經文の翻譯により佛教思想が頗る蔓延して、殆ど全土を蓋へるやうになつてから、從來の思想もこれに喚起されて、最初は新舊思想の軋轢を惹起し、多くの社會現象ミなつて現はれたものも尠くない、例へば北齊